

5. 校内研究のまとめ

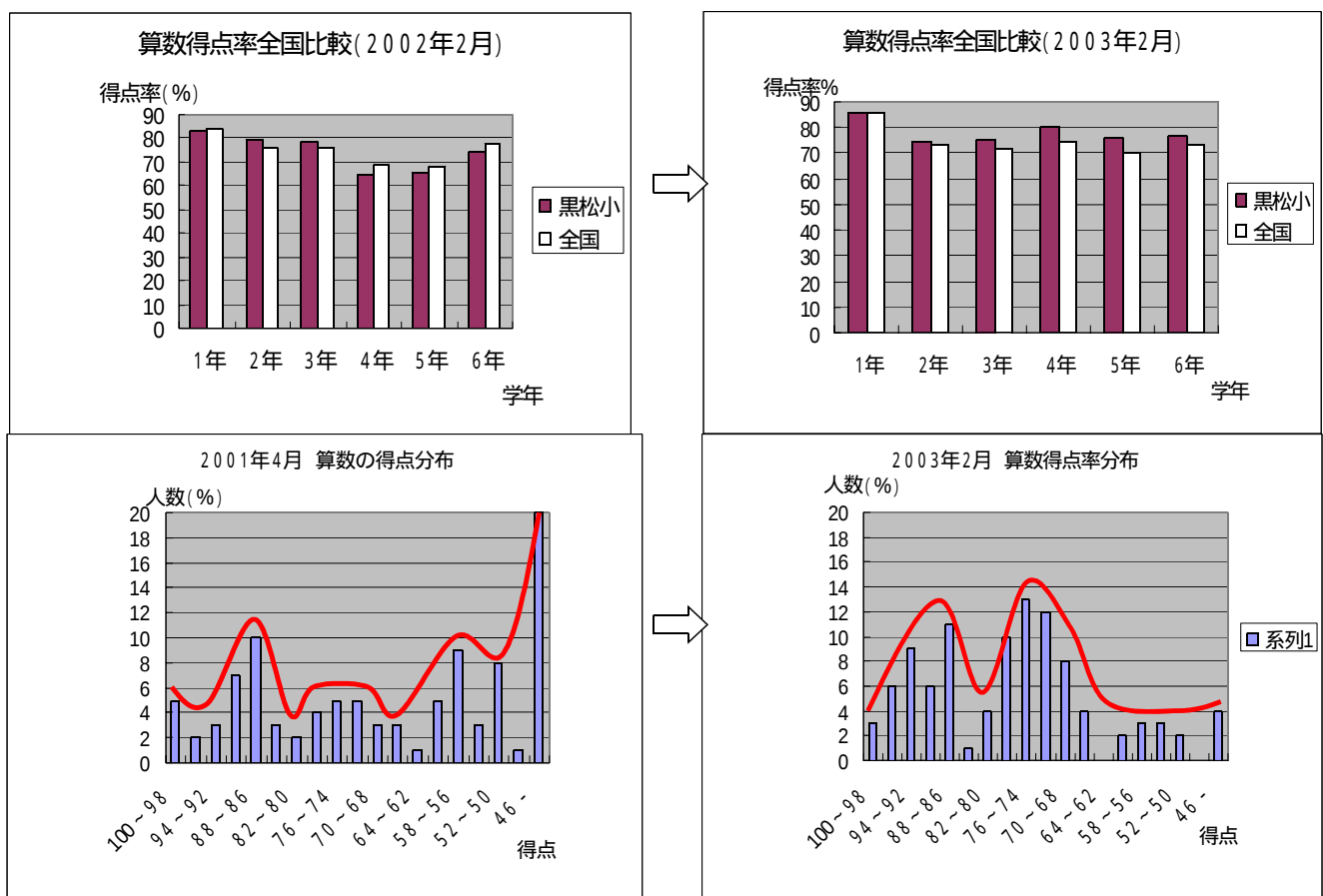
(1) 重点努力事項に関する結果と考察

これまで各学年における研究の経過及びその成果と課題について述べてきた。ここでは、今年度重点課題として掲げた「学習形態の工夫」「スキルタイムの充実」「評価の工夫」の3つの視点から校内研究全般にわたり考察を加えることとする。

1. 学習形態の工夫

基礎・基本のより一層の徹底を図るため、昨年までの少人数グループ指導を見直し、今年度は3年生以上において習熟度別グループ指導を全校体制で取り組んできた。また、特殊学級との交流授業をはじめとして、保護者ボランティアティーチャーの導入、1年チームティーチング、2年プレ習熟度別指導な様々に学習形態を工夫し、より子供一人一人にあったきめ細かな指導を行ってきた。

(1) 14年度CRT - 検査結果に見る学力の変容(詳細は別紙資料「CRT検査結果」参照)



<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/syujuku/gurupu/h14crt.pdf>

< 成果 >

- ・ほとんどの学年で、得点率が全国平均を上回る結果が出た。2001年4月、2002年2月のデータと比較すると特に4年生以上の伸びに大きな変化が見られる。
- ・正答率の分布では、60以下が激減し、その分中・高得点層が増え、全体の底上げができた。
(注1): 13年度4月の時点でもっとも分布に開きのあった学年を抽出し変容を比較
- ・観点別得点率では、ほとんどの学年で全国平均を上回っている。
- ・「数と計算」領域では、全学年で全国平均を上回っている。13年度2月の検査では、4年生以上の学年が全国平均を下回っていたが、今回大きな伸びを示した。

< 課題 >

- ・中、下位群の伸びに対して、最上位群の伸び率はそれほど大きくはない。
 - ・「表現・処理」に比べ、「数学的な思考」「知識・理解」の伸び率がそれほど大きくない。
- また、2年生には若干だが全国平均を下回る結果も見られる。
- ・「量と測定」「図形」領域では、1年生のみ全国平均を若干下回る結果となった。

以上のような結果から、学校全体として見ると子供たちの学力は大きく向上したといえる。

しかし一方で、個々の児童、特に算数を得意とする児童の伸びがそれほど大きくはなく、児童の能力や可能性を十分生かし切れていない面も見られる。

児童一人一人の力に応じた課題設定や指導方法の工夫など、より個に応じた指導を推進していく必要があると考えられる。

（２）ボランティアティーチャー

・昨年度の反省をもとに、今年度は習熟度別グループの編成は担任及びグループ担当者が行うことを基本としてきた。

また、グループも1年間固定することを原則とし、7月、12月の時点で見直し、若干の入れ替えを行うようにした。

その結果、7月の編成替えでは力を付けた児童が習熟度の高いグループに多数移動したため、グループ間の人数に偏りが生じてしまい、中には40人を越えるところも出てきた。

そこで、保護者の中からボランティアティーチャーを募り、担任の補助として指導にあたる体制を取り入れた。主として形成的評価のチェックや、分度器、コンパスなど用具の扱いに関する指導補助など、担任一人では手の届きにくい部分をボランティアティーチャーによって補うようにした。

その結果、タイムリーに児童に評価を返したり、教師が児童のつまずきや学習状況をじっくり観察できる時間的なゆとりが生まれた。1月以降は3箇学年で8人のボランティアティーチャーが児童の指導にあたった。（詳細は黒松小学校PTA新聞15年3月号参照）

<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/borantia/koe.pdf>



（３）特殊学級との交流授業

・グループの中での指導が難しい児童、より個別指導の必要な児童においては、保護者の承諾を得た上で特殊学級との交流授業を実施した。通常学級では目立たない存在であっても、特殊学級の中では自分がリードしながら学習を進める場面が見られるようになった。また、児童同士の関わりも生まれ、互いに刺激し合いながら意欲的に取り組む様子も見られた。

（４）1学年「チームティーチング」

- ・少人数加配講師1名が担任とチームティーチングを組み、全クラスの算数指導にあたった。
- また、1月からはクラスを2つの等質グループに分け、グループ別の指導体制を試みた。空き教室の不足から教室と図工室を使つての実践となったが、教室の移動や図工室が1年生にとっては広すぎる等、学習環境の変化によって児童が落ち着かなくなるといった課題が出された。

（５）2学年「プレ習熟度別グループ指導」

- ・3年生からスタートする習熟度別グループ指導にスムーズに移行させるため、2月から「プレ習熟度別グループ指導」を計画し実践した。3年生からの指導体制に慣れさせるとともに、保護者に対してはその趣旨や実施方法について説明し、習熟度別グループ指導への理解を得ることを目的として実施した。

児童の様子から、学級のわくをはずして他のクラスの子と学習することに関しては特に問題

は見られず、「児童同士が互いに刺激あってレベルアップしている。」「自分のクラスではあまり活躍できない子が、グループの中では活躍していた。」「自信がついて意欲的に取り組むようになった。」等の成果が見られた。

一方、児童の実態把握に時間がかかるため、担任同士のコミュニケーションや情報交換の重要性が改めて指摘された。

2. スキルタイムの充実

「基礎力（読み・書き・計算）」育成のため、始業前の10分間を全校スキルタイムとして1年間継続してきた。内容は100ます計算やドリル問題を中心に漢字の読み書き、読書など本校独自の「基礎・基本の手引き」（資料：「黒松小学校基礎基本の手引」）に沿ったものを取り上げ、徹底反復練習に取り組んだ。

スキルタイムの実施にあたっては、朝の職員打ち合わせをなくし、朝会や各種集会活動を木曜日の5校時に設定したり、校内にWEB掲示板を立ち上げて日常の連絡調整を行ったりするなど、週時定表をはじめ、教育課程全体の見直しを行った。

11月には、校内研修として「スキル学習会」を実施し、実践事例の紹介や指導にあたってのポイントなどを出し合い、指導技術の向上と学校全体としてより統一した指導体制のもとでスキルタイムが運用できるよう確認しあった。

【100ます計算について】

本校では計算スキルの柱として13年11月より100ます計算を継続実践している。

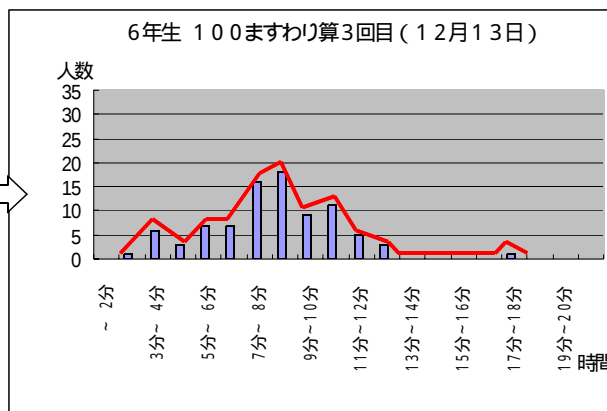
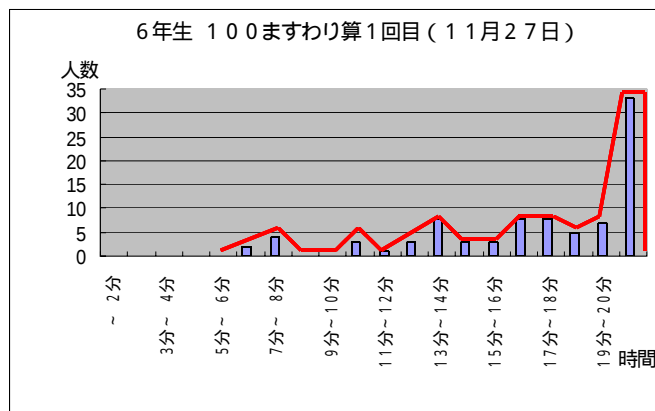
昨年実施した変容調査では、わずか2週間でどの子ども計算力を大幅にアップさせなど著しい伸びが見られた。

実施方法は、1・2年生が週2回のスキルタイムの時間に、3年生以上は算数のはじめの5分間を100ます計算にあて毎時間行った。

各学年の今年度の状況を見てみると、約8～9割の児童が学年の目標を達成している。また、6年生の中には「わり算の第3類型」100問を1分20秒台で解くなど、めざましい伸びを示す子ども複数見られる。100ます計算についてはどの学年も意欲的に取り組んでいる。自分の力や記録の伸びを即座に確認できることが一番の要因になっているようである。また、計算力の向上にとどまらず、児童の集中力育成に大きな効果があることも見逃せない。

しかし一方、指導にあたってはきちんとした目標や課題意識を持たせながら実施していかないと、他との競い合に走ったりマンネリ化に陥るケースも考えられる。あくまでも個々のスキルアップが目的であることをしっかりと意識させ、同時に教師のきちんとした評価や賞賛を与えながら児童の意欲を持続させる工夫が必要である。今後も100%の児童が目標を達成できるよう継続させていきたいと考えている。

100ます計算2週間の変容（13年11月～12月）



3. 評価の工夫

(1)「習熟度別グループ指導」に関する児童と保護者の意識調査

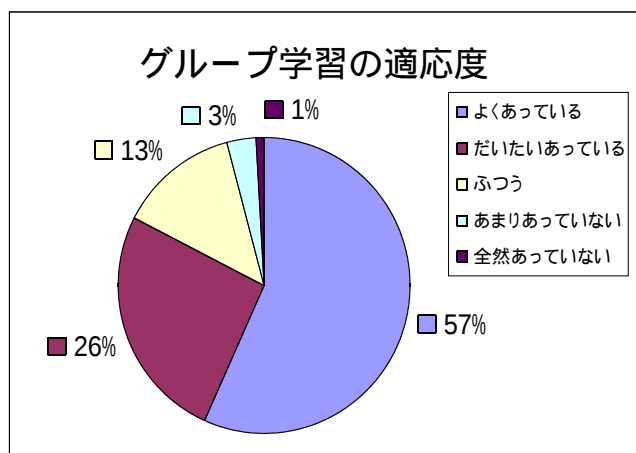
習熟度別グループ指導に関して、児童や保護者がどのような意識を持っているのかを明らかにし、今後の指導体制や改善点を探るため、それぞれの意識調査を実施した。児童については5年生を抽出学年として全員に実施、また保護者に対しては、2回にわたって授業を公開し、実際に指導の様子を参観した上でアンケートに記入してもらった。

習熟度別グループ指導 児童アンケート結果（詳細は資料：「児童アンケート調査結果」参照）

<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/syujuku/gurupu/tyosa.pdf> （調査結果）

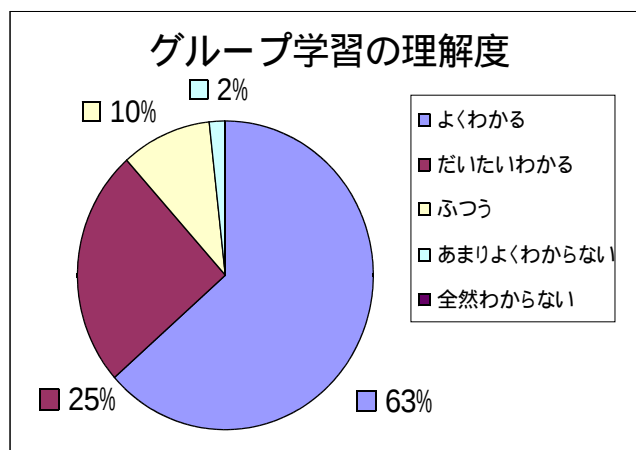
・調査の結果、グループ別学習の適応度については、83%の児童が「よくあっている」「だいたいあっている」を選択し、「ふつう」を含めると96%を占めた。

理由として、「自分に合ったペースで勉強ができる」「同じ力の人が集まっているから安心して勉強できる」などの回答があり、多くの児童がグループ別学習を受け入れ肯定的に捉えていることが分かった。



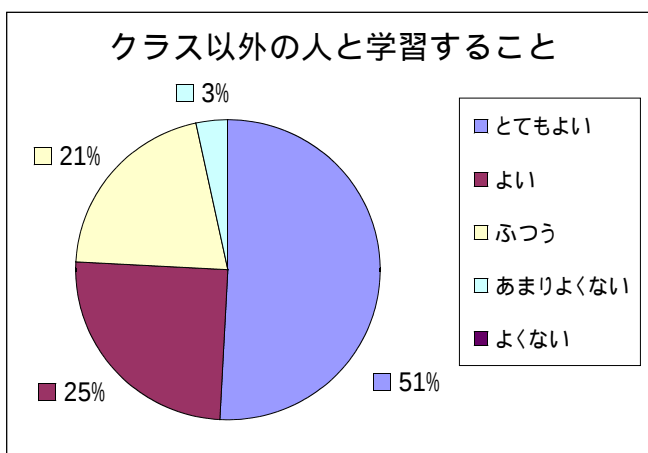
・学習の理解度の調査では、89%の児童が「よく分かる」「だいたい分かる」と答えており、「あまりよく分からない」は2%である。

理由として、「先生の教え方が分かりやすい」「ちょうどよいスピードで勉強できる」などの回答があった。

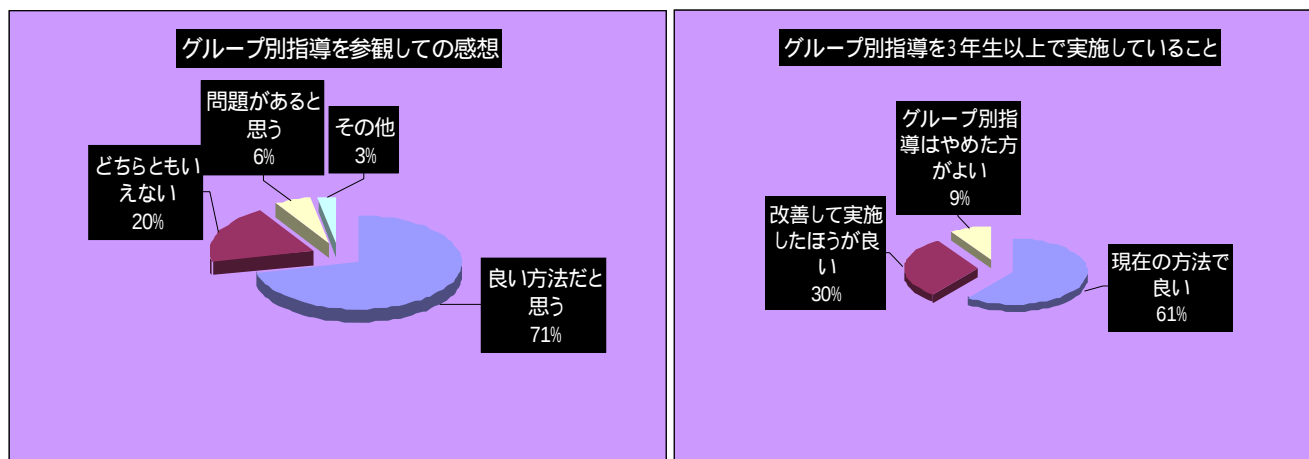


・クラス以外の先生や友達と勉強することについては、「とてもよい」「よい」を選択した児童が76%おり、「ふつう」を含めると97%を占めた。

当初子供達の中にグループ学習に対する抵抗感や差別意識がでることを心配する声があったが調査結果からは、むしろグループ学習のよさや効果を児童自身が感じていることを示している。



習熟度別グループ指導保護者アンケート調査（詳細は資料：「保護者アンケート調査結果」参照）



<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/syujuku/gurupu/hogosya.pdf> （調査結果）

<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/syujuku/gurupu/8gatu.pdf> （学校便り 8 月）

習熟度別グループ指導に関しては 71% の保護者が「良い方法だと思う」と答えている。

○ 良い方法だと考える主な理由

- ・自分の理解度にあった授業内容，クラスに分かれているので子供のためには良い。
- ・個々にあった指導を受けることで理解度も増す。
- ・その子の力にあった授業なので，授業に集中している。

○ 問題がある（6%）と考える主な理由

- ・子供同士の学び合いや育ち合いがない。
- ・劣等（優越）の意識をもたないか。
- ・グループ化よりも学級の少人数制が優先ではないか。

○ どちらともいえない（20%）と考える主な理由，

- ・グループによっては人数が多すぎる。
- ・子供が興味をもてるように授業の工夫を望む。
- ・3年からグループ別は早すぎる。（反対にもっと早い時期から）

○ 「保護者として配慮してほしい事柄」

- ・グループが変わることが学力低下ではないことを理解させてほしい。
- ・保護者公開の時などは，他の子のレベルが分かってしまうので避けてほしい。
- ・児童の中での優劣の意識がないようにお願いしたい。
- ・少人数でも，分からない子はいらと思うので，常に分かるように指導してほしい。

など，子供に差別意識を持たせない配慮をしてほしいという意見が大半を占めている。

以上の結果から，大部分の保護者は本校における習熟度別グループ指導を肯定的に受け止めていることが分かった。特に年度末から新年度スタートかけて，前年度取り組んだ少人数グループ指導の成果と課題を踏まえ，早い時期に学校としての方向性を打ち出した。

そして，その方向とねらいについて校長からの保護者への直接説明や対話，さらには学級担任を通しての個別の説明など，様々な機会を捉え繰り返し理解を求めてきたことがこうした結果につながったのではないかと推察される。

ただ，保護者の声にもあるように，児童同士の上下意識の問題については当然のことながら十分な配慮が必要である。本校では，グループ別指導の開始にあたり各学年ごとにガイダンスを設け，児童に対してその主旨や目的について説明する機会を設けた。さらには道徳をはじめ他の教科指導など，あらゆる機会を捉えては児童に上下意識や差別意識を持たせない指導を繰り返してきた。

その結果，習熟度別グループ指導を取り入れたことによる児童同士のトラブルは，ほとんど見られなかった。

(2) 児童の学習意欲に関する実態調査 (「児童の学習意欲に関する実態調査結果」参照)

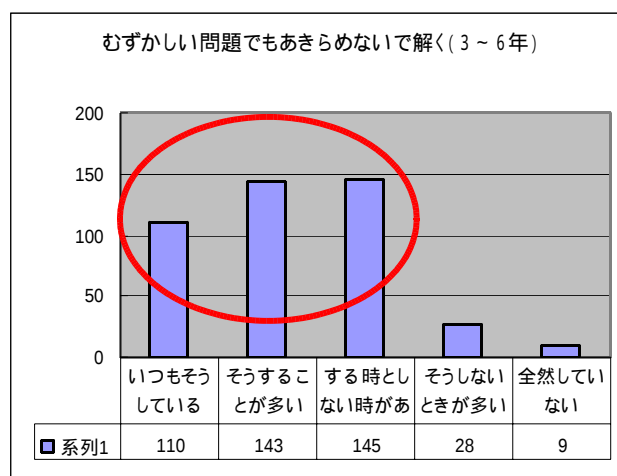
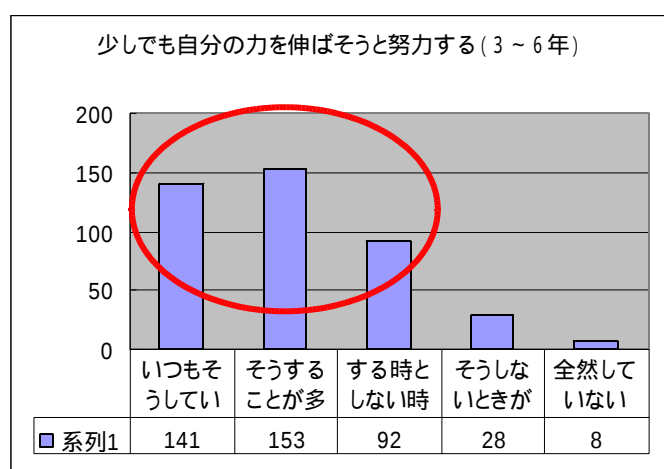
CRTの検査と同時期に児童の学習意欲に関する調査を実施した。調査にあたっては、以下の点を考慮した。

- 児童の学習意欲が高まったと判断される児童の行動を各要因ごとに分類し、児童の自己評価のもと、アンケートとして記入させる。
- 調査は研究の関連で、「算数の学習」という特定の場面をイメージさせ実施した。
- 学年の発達段階を考慮し、質問内容は1・2年用、3～6年用に分けて作成し実施した。
- 3年生以上については、教師の指導の振り返りに関する項目も入れ、授業や教師の指導を児童自身がどう受け止めているかもあわせて調査する。

<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/syujuku/gurupu/h14crt.pdf>

【調査結果と考察】

< 児童のプラスの側面 >

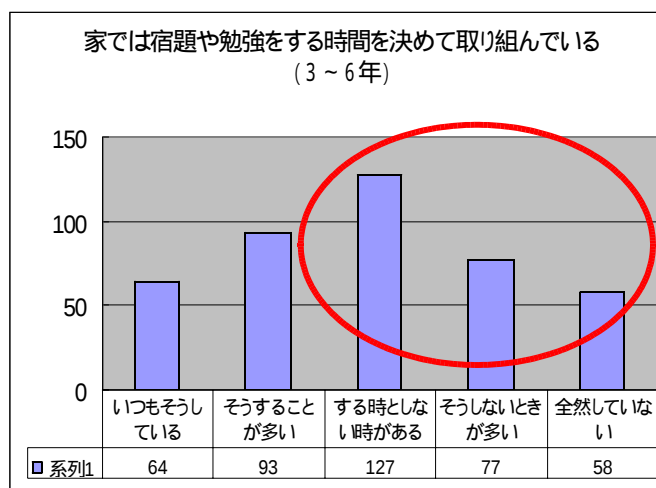
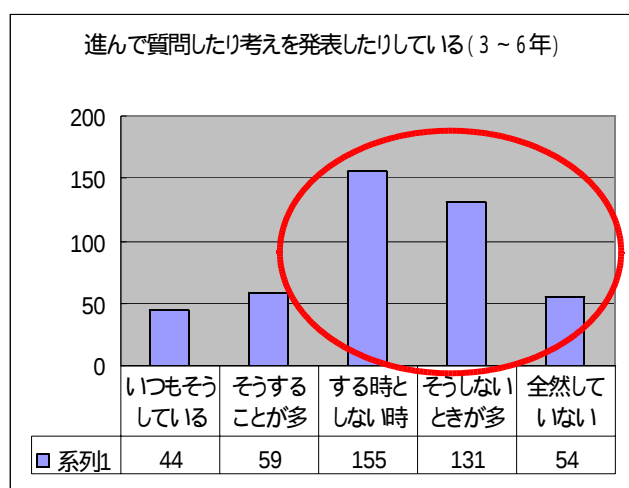


・「自分の力を伸ばそうと努力している」は「いつもそうしている」又は「そうすることが多い」と答えた児童が全体で70%、「する時としない時がある」を含むと93%にのぼる。

また、「むずかしい問題でもあきらめなくて解いている」は「いつもそうしている」又は「そうすることが多い」が約66%、「する時としない時がある」を含むと約95%にのぼる。

さらに「まわりに流されず、自分のペースで学習を進めている」「先生や友達の話をしっかり聞いて、まじめに取り組んでいる」と答えている児童の割合も多く、おおむね算数に対しては前向きに取り組んでいるといえる。

< 児童の課題として考えられる側面 >



・積極的に質問をしたり発表したりしようとする児童の割合が低い。また、「自分の発表の場があまりない」と感じている児童も多い。

本来、グループの少人数化によって発表や質問の機会が増えることを考えると、「ねり合いの場の設定」や「児童の発表意欲を促すような指導の工夫」など、今後授業の質的な改善を進めていく必要がある。

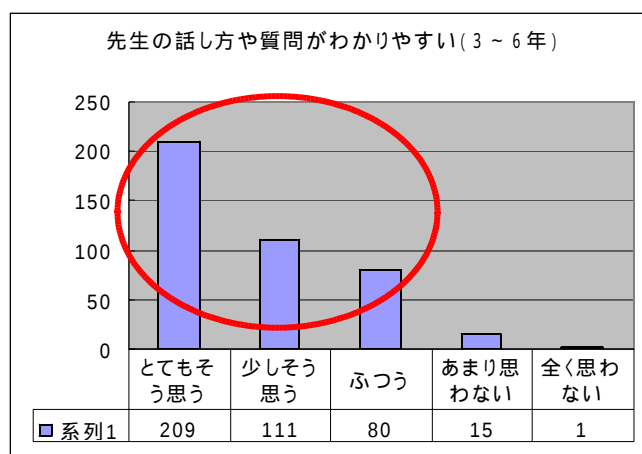
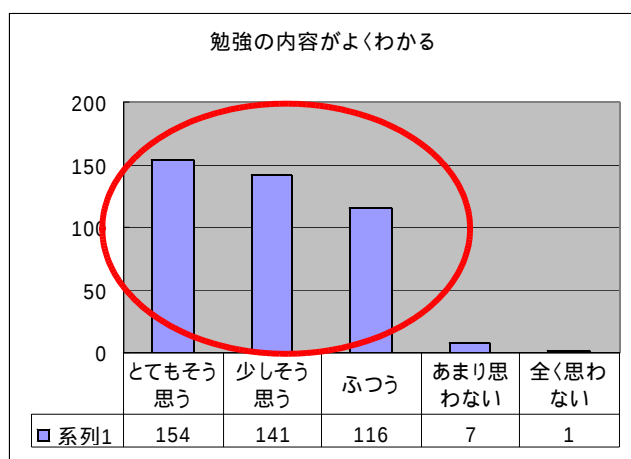
・予習・復習等、宿題以外にも積極的に家庭学習に取り組んでいると答えた児童（「いつもそうしている」「そうすることが多い」）は全体の約36%である。学年ごとの割合を見ると高学年よりもむしろ低学年の積極的であるという結果が出ている。

・時間を決めて宿題や勉強に取り組んでいると答えた児童（「いつもそうしている」「そうすることが多い」）は3年生以上では37%しかない。

・「宿題や学習用具等忘れ物をしないよう意識する」に関して、「する時としない時がある」～「全然していない」と答えた児童が全体の約37%にのぼり、忘れ物に関して意識が低い児童が少なからず見られる。

以上のことを勘案すると「少しでも勉強ができるようになりたいと思って努力している」と答えている児童が多い反面、時間を決めて家庭学習に取り組むなど、きちんとした学習習慣を形成し、計画的かつ積極的に学習に取り組む児童の割合はそれほど多くはないといえる。また、「宿題や家庭学習」、「学習用具の忘れ物」など児童の生活習慣に関わる課題については、保護者との連携をより一層深め、学校と家庭の両面から繰り返し指導していく必要がある。

<教師の指導にかかわる内容>



・教師の指導に関しては、「学習内容がよく分かる」「わかるまでていねいに教えてくれる」「勉強についてアドバイスしてくれる」「質問や話し方がわかりやすい」と感じている児童の割合が多い。

今年度の研究の柱として取り組んできた習熟度別グループ指導、TTや個別指導などを通して、児童への「きめ細かな指導」が図られた成果と考えられる。

(3) 算数のあゆみ

基礎・基本の習得のためには、家庭との連携が不可欠である。そこで、今年度は「算数のあゆみ」を通信票と切り離し、年3回長期休業前に保護者に通知することとした。家庭の協力を得ながら、長期休業中の児童の学習習慣を形成したいと考えたからである。また、あゆみや個別面談を通して児童の学習状況を知らせることにより、より具体的な課題や目標を持たせることもねらいとした。

内容については算数部会を中心に到達目標や評価規準を吟味し、内容や記述の見直しを行った。評価はそれぞれのグループ担当が行い、担当を通して児童に配布した。

第4学年 算数のあゆみ 【4月～7月】(一部抜粋)

()組 ()グループ 氏名()

グループ担当()

単 元 名	学 習 目 標	A	B	C
算数の関心・意欲・態度	・算数に関心を持ち、進んで学習しようとする。			
1．大きい数のしくみ	・億，兆までの整数の位取りのしくみがわかる。			
	・億，兆までの整数を読んだり，書いたりすることができる。			
2．円と球	・円や球の中心，直径，半径などの用語がわかる。			
	・コンパスを使って円を書いたり，長さを移し取ったりすることができる。			
3．わり算の筆算(1)	・わり算の意味がわかる。			
	・2～3位数÷1位数の筆算の仕方がわかり，計算ができる。			
	・何倍かを求める問題や，かけ算・わり算混合の計算を一つの式にして計算する問題ができる。			

<http://www.ex.sendai-c.ed.jp/kuromatu/tokushoku/hyoka/tusin/tusinhyo.htm>

(4) 学習チェックカード

学習の習得状況を的確に捉える手立ての1つとして，評価カードの開発を行ってきた。

もともと習熟度の低い児童のレディネスや学習状況をチェックする目的で作成したものを全学年で活用できるよう改善を加えたものである。

「算数のあゆみ」との整合性がまだ十分図られていない面があり，今後さらに検討を加え改善していく必要がある。しかし，児童の学習状況の把握やつまずきの診断，学習の振り返りや自己評価能力の育成など，活用の仕方によってはより有効な評価活動が可能になるのではないかと考えている。

3 学年 算数 学習チェックカード

3 年 組名前() 一部抜粋

基礎となる力	できた	単元名	学 習 す る 内 容	できた
九九がよどみなくいえる		1 かけ算	かける数やかけられる数が0の場合のかけ算ができる	
かけ算の意味がわかる			かける数やかけられる数が10の場合のかけ算ができる	
時計を見て，時刻がいえる		2 時こくと時間	1時間＝60分，1日＝24時間，「秒」，1分＝60秒がわかる	
たし算ひき算ができる			時間や時刻の求め方がわかる	
九九がよどみなくいえる		3 わり算	わり算〔1人分を求める計算〕を式に表すことができる	
「1つ分の大きさ」「いくつ分」がわかる			わり算〔何人に分けられるかを求める計算〕を式に表すことができる	
倍の意味がわかる			九九を使ってわり算の答えを求めることができる	
			わり算を使って何倍かを求める計算ができる	
			 何十，何百÷□の計算のしかたを考える	